[redacted]

久保庭真彰

『現代社会主義経済分析の基礎』

――計画・コンピュータ・市場――

岩波書店　1990. 3　xxi＋392ページ

本書は，ソ連・東欧の指令的行政的中央計画経済システムの改革過程で生まれた分権的社会主義経済システムを対象にして，政治経済学的概念，数理経済学的構造，およびコンピュータ・シミュレーションによる数量分析という3つの接近方法を用いて，それを体系的に明らかにすることを試みたものである．本書の章別構成はつぎのようになっている．第I章「社会主義経済の基礎理論」，第II章「位階的組織の調整メカニズムと市場メカニズム」，第III章「社会主義経済の動学的多部門モデル」，第IV章「最適計画一価格論のソ連経済への適用」，第V章「ソ連経済の再生産構想」，第VI章「ハンガリー経済の再生産構造」．

第1章では，社会主義経済の概念をマルクスにさかのぼって再検討し，分権的計画経済に基づく社会主義経済こそ，指令型社会主義に代置さるべきものであるとし，次章以下の数理経済学的展開の基礎を与えている．

マルクスやエンゲルスの描いた将来社会(資本主義的生産様式の後にくる生産様式)は，商品・貨幣システムを除去し，意識的・計画的に生産を制御する社会であった．ところが，現在の社会主義諸国では，市場経済を発展させることが共通の課題になっている．この両者は矛盾しないかと問い，著者は次のように答えている．マルクスによれば，社会主義の生産物が「商品性」をもつ基本的原因は，生産力水準が相対的に未発展であり，「労働に応じた分配」の原則が残存しているからである(p. 12)．この条件の下では，「1つの工場」的生産システムや，投入労働の直接的計算は不可能であり，商品・貨幣関係の助けを借りなければならない．それを前提にして，計画経済を機能させるとすれば，共同的計画性と諸個人の自由な発達を保証した，生産要素配分システムの構築が必要になる(p. 21)．そこで，著者は「市場メカニズムをビルトインした計画経済の機能モデル」の系譜(ノヴォジロフ，カントロビッチ→ブルス→シーク)を跡づける．分権モデルを体系化したブルスによれば，このシステムの下での投資調整は，①国家が政策的に行うパラメーター(価格，利子率，賃金その他)による調整と，②規模による投資分担つまり大規模投資は，国家がおこない，その他の投資は個別企業にまかせる，というものであった．①の調整をすることによって，産業レベルでの「代表企業」が市場に提供され(ブルス)，これを巡って個別企業の競争と淘汰がおこなわれる(シーク)のである．②の分野の調整について，著者はブルスの投資領域の振り分け方に賛成せず，むしろ公共財(国家投資)とそれ以外(企業投資)とに投資領域を分けるべきであるという．結局，筆者は「労働者参加をビルトインした修正ブルス＝シークモデル」に，資本市場，労働市場と情報・経済データの整備と公開を付け加えた社会・経済システムを，現在考えうる最善の社会主義モデルであると主張している．しかし，その後，欧州「社会主義国」で起きた市場経済化への雪崩現象を考慮し，第6節で著者はその動きを取り入れ，自説の補修努力をしているが，現実の動きの方が遥かに早く，ここの部分は十分成功しているとはいえない．

著者が「基礎論」で展開した見解について，つぎの点を指摘したい．①資本市場の導入は「所有に応じた分配」を，労働市場の導入は賃労働の容認を意味するが，この点を「社会主義経済」とどう両立させるのか．著者のように，マルクスの原論だけに立脚して，この現象を説明できるとは思えない．②著者のように社会主義の存在理由を問うならば，社会民主主義系統の社会主義を含め，社会主義概念の源流にまでさかのぼった根本的な再検討が必要であると考えるがどうか．③ソ連の市場経済化概念は，今

日の「調整資本主義市場経済」とどこが違い，どのような意味で社会主義経済なのか．これは現在問われるべき大問題である．④総じて分権モデルは，生産行動の決定権を分散し，民主化する点に論点が集中し，企業の刺激・報酬システム，需要への企業の適応行動の研究とモデルにインプットすべき消費需要への配慮，多様な所有形態＝所有者意識＝当事者能力＝経営者主権などへの十分な配慮がなく，従って分権モデルでは，企業活力と消費者主権を引き出せないようにみえるがどうか．この欠陥は，数理派のモデルに特に強い．この点は，最適価格論のところで再説する．

さてこの著作の最も優れた貢献は，分権的社会主義経済を多数の文献を駆使して数学モデルで体系付け，それぞれについて，厳密な数学的証明(解の存在，安定性，収束速度，情報流量)を与え，いくつかの独自の定理をつくり，実際のソ連・ハンガリーのデータで，コンピュータ・シミュレーションを行い，多数の興味ある「事実」を抽出していることである．読者は，本書からこの分野の最も信頼のおける計画モデルの流れと，現在までの最高水準の開拓分野を知ることが出来る．筆者は，著者の並々ならぬ力量の確かさとその膨大な作業量に深い敬意を払うとともに，世界の学会への貢献に賞賛を惜しむものでない．

現在のソ連の経済改革との関連で，ソ連の数理派の価格形成論に対するアプローチの著者による紹介と検討・改善はとくに興味深い．周知のようにソ連経済は，「国民経済1工場論」的コンセプトに災いされ，生産財価格とくに基礎原材料の卸売価格に十分な正常利潤を上乗しない低い卸売価格と，最終財価格による全付加価値の一挙の回収という価格構造をいままでずっと継続してきた．この歪んだ価格構造のもたらした国民経済的損失は計り知れないものがある．詳論は避けるとしても，正常な価格構造が与える経済的メリットのすべてを失ったばかりでなく，政治的・社会的なマイナスの影響，たとえば補助金行政に付随する官僚的独善，ソフト予算制度による企業意欲の喪失，財政の再分配コストの加重化，盲目的対外貿易政策などの根本原因の1つは，このような歪んだ価格構造にある．ソ連の数理派は，この問題に取り組み，あるべき価格構造を計算して，そのような価格構造を達成するための係数を発表した．このような研究が，最近の市場制導入に伴う価格改訂政策に大きな貢献をしたことは疑いない．

最後につぎの3点につき私見をのべ，著者の見解を聞きたいと考える．

①希少資源の投入選択において，時間軸上の選択コストとしての時間割引率と，空間軸上の選択コストとしての機会費用とは，その性質が原理的にことなるから，数量的にも異ならなければならない筈である．この両者を区別し，しかも両一モデルに組み込んだ統一モデルを作ることは出来ないものだろうか．

②本書の統計データは，基本的にMPSベースの産業連関モデルに依拠し，西側のGNPにリンクしていないし，また経済循環に大きな比重を占める財政統計との関連も明かでない．したがって，本書が示すソ連の輸入依存率5.21%，輸出率3.12%(ともに1977年，p. 266)その他の再生産構造比率は，サービス生産を含む西側概念のGNPを利用すれば，この比率はもっと小さな値になる筈である．この当時の研究としてやむを得ないところであろうが，最近のソ連側の研究を考慮すれば，現時点ではこうした再生産構造分析は可能だろうと考える．

③最適計画-価格論の章における平均費用総額最小化計画(p. 217)では，計画当局がすべての個別生産単位の限界費用曲線を知り，最適計算をし，それを企業に通知し，結果を企業の評価関数に結合して社会的最適生産量に企業を誘導する必要がある．これは，計画当局にとり膨大な計算作業と，情報収集と企業誘導コストを必要とするうえ，その最適生産への誘導が成功するとは限らない．というのは，この場合個別企業は自らの利潤最大点を社会全体のために放棄することを余儀なくされているからなのである．著者はこうした問題，たとえば「限界費用＝価格」点で当該企業の社会的最適生産点がきまる場合(p. 218 図IV. 7　レントの形成)，個別企業の操業点をどの様にしてその点にまで誘導するのかについて，注意を払っていないようにみえる．競争的市場経済機構の下では，市場価格が需給均衡点に収束する動きに平行して，各生産単位はそれに反応し，限界費用＝価格となる点で自主的に製品供給量が決定され，個別均衡(利潤最大)と市場均衡(需給一致)の同時達成が実現され，最適操業点の決定と誘導をめぐる計画当局の介入は一切不用となるのである．

さて，最後に付言したいことはつぎのことである．この著作が準備される時期のソ連の経済データの貧困さは，目を覆うばかりの状態であり，数少ない公表数字を拾い，西側の研究でそれを補完し，相互の斉合性を確かめながら，意味ある統計データを自分

で作成し，それをベースに経済分析をすすめるような状態を余儀なくされた．これは，さながら化学分析を試薬作りからはじめる化学者，綿花の栽培から始める織物業者・縫製業者になぞらえることが出来る．この点について，最近の社会主義経済は，経済情報の整備・公開に一定の前進を見せつつある．またその理論関心はブルスの分権モデルを遥かに越えたところに移動してしまった．こうした状況を考慮すると，今後の社会主義経済研究は，その研究対象に資本主義経済システムを取り入れることと並んで，方法論としては，マルクス経済学のもつ歴史的・制度的・演繹的方法とならんで，近代経済学のもつ政策的・機能的・帰納的視点を踏まえた研究方法を全面的に導入すべきであろう．このような資格を最も豊かに備えたこの本の筆者に，この新しい状況に立脚した，本書の続刊が今後刊行されることを期待してやまない．そうであっても，この種の研究基盤の上に，そうした新潮流が築きあげられているのであって，新しい情勢によってこの著作の価値が失われるものでは決してない．

［望月喜市］

[redacted]